

シャドーイングによる日本語語学能力の向上の実証的研究

—初級レベル大学日語の学習者を対象に—

王 鵬*・胡 小春**

要旨

もともと通訳の練習法の一つであるシャドーイング練習法は、近年の研究で語学の勉強に効果の高い練習法であるとしばしば証明されている。本研究は、それを JFL の一部である大学日語の学生に導入し、その効果（特に聴解能力の向上）と可能性を実証するものである。実験の結果、シャドーイング練習法は効果の面においても実行可能性の面においても十分有効であると証明した。特に、テストを行った結果、練習教材と関係のない部分の効果は練習教材と関係のある部分より高いと分かった。

1 研究背景と目的

一般的に、JFL（海外での日本語学習者）は同じ学習時間の JSL（国内での日本語学習者）より、聴解と会話の面における能力が劣っていると言われている。それは JFL 学習者が周囲の言語環境の制限のため、日本語の音声のインプットと口頭のアウトプットが足りないからだと言えよう。

大学日語とは、大学で一般教養として開設された日本語の授業であり、ゼロスター

トは一般的である。その学習者は、大学で日本地域研究あるいは日本語・文学などを専門とするのではなく、一般教養として日本語を勉強する大学生であり、JFL でもある。科目の履修は自由に選択可能なので、今までの調査と筆者本人の調査では、その勉強意欲は日本語を専攻する学部生より高いとみられる。しかし、その一方、学習時間は1年から2年の間で、週にわずか2時間か4時間しかない。しかも、1クラスの人数は30人から60人までが普通である。伝統的な教育の流れでは日本語の基本的な文法力と閲読能力はある程度備わっているが、JFL としての聴解と会話の能力の不足はより顕著であるとしばしば指摘されている。したがって、多人数に対応できるより効果的な聴解と会話能力が向上する教授法の開発が迫られる。

同時通訳の訓練で知られたシャドーイング練習法は、今までの研究で聴解能力をはじめ、言語能力の向上に効果があるとしばしば挙げられている。したがって、本研究では大学日語において、シャドーイング練習法の早期導入とその効果を実証的方法で検証することを目的とする。

* 北京第二外国語学院（大学）日本語学部准教授、専門：言語学と応用言語学・日本語教育

** 大連外国語大学日本語学院准教授、専門：日本語学・日本語教育

2 先行研究と本研究の位置づけ

2.1 大学日語とシャドーイング

大学日語の教育法あるいは実践研究は数多くなされてきたが、本実証研究まででは、新しい教育道具や、サブカルチャーなどの教育教材などを導入するというような教育現場の教育環境改善に目を向けた研究が主流であった。例えば、張威（2002）では、教育現場に教育内容に合う視聴覚教材の導入により、教育効果と学生の勉強意欲を向上させたと指摘した。しかし、また後述するが、大学日語の学習者は、日本語文化などを専門とする学生より、そもそもその勉強意欲が高いというのが現状である。そして、有効な視聴覚教材の導入で、ある程度学生の聴解力と会話力をアップさせることはできるが、教育現場に限られるという制限がある。そこで、大学日語の学生たちにふさわしい練習方法をいかに見つけ出すのがより大切だと考えられる。

シャドーイングによる語学教育への応用については、理論と実践ともに多くの成果が築かれていた。日本では実践の面では門田（2007）の一連の研究で、シャドーイング練習法は、英語教育に効果があると証明された。また、迫田（2010）の一連の研究も日本語教育現場でのシャドーイング法の導入も聴解力と会話力の向上にも有効であると証明された。しかし、その一連の研究の研究対象は、日本での英語学習者かあるいは JSL であり、大学日語の学生の状況とは違う。しかし、目標言語の勉強場所は海外であるという点では、門田の研究対象—日本での英語学習者—と類似しているが、目標言語そのものは、迫田の JSL と同じく日本語である。したがって、今までの研究で触れていなかったが、シャドーイング法の大学日語の教育現場への導入は、十分可能であると考えられる。

先に述べたように、シャドーイングは大学日語の教育に導入することが十分可能だと考えられるが、迫田の研究に指摘されたように、練習にかなりの難しさがあるため、途中であきらめる可能性があると思われる。したがって、この点においては、実験の適性を考える必要がある。王婉莹（2005）では、北京における大学日語の履修生を対象に、学習意識のアンケート調査を実施し、日本語学科の学生との比較も行った。その結果によると、大学日語の履修生は普通の日本語学科の学生より勉強意欲が高いと指摘した。筆者も教えている北京第二外国語大学で、2011年に147名の大学日語の履修生を対象に行った意識調査の同じ部分にも、ほぼ同様の結果が得られた。したがって、その高い意欲は、実験が順調に進められる保証につながると考えられる。

2.2 本研究の位置づけ

以上のように、大学日語の事情と今までのシャドーイングの研究を踏まえ、本実践研究の位置づけはシャドーイングを大学日語に導入する可能性とその効果を実証してみることにある。それは、以下のようなポイントに絞られる。

(1) 考察対象

考察対象は、初めて日本語に触れた入門レベルの段階で行うこととした。それは、中国での大学日語の教育は大学によって1年間と2年間の区別があり、2年目で行うと、研究の適用範囲がかなり限られてしまう可能性がある。それに、北京第二外国語大学の大学日語の履修生は、英語学部 of 学生が多く、高年次になると、専門の授業でシャドーイング法を導入されてしまう可能性もある。また、シャドーイング法の早期導入は、学生に勉強

方法を身につけさせ、長期的にも効果があるという期待もある。したがって、本研究の考察対象は、大学日本語を履修する第一学期目の学生とする。また、教育現場の実情を考え、会話能力のチェックは困難であり、今回の考察は聴解能力に絞ることとした。

(i) 考察内容

考察内容は、以下の点が含まれる。

- ①シャドーイング法を大学日本語の学生に導入する適性を考察する。
- ②シャドーイング法による大学日本語の学生への聴解能力面の影響を考察する。

(ii) 考察報告の仕組み

考察報告は、以下の仕組みで報告する。

- ①**実験の設計**：この部分では、実験対象の選択、前調査、教材の選択、練習の手順などについて説明する。
- ②**結果の報告**：この部分では、実験のテストの結果を報告する。
- ③**結果の分析**：報告した結果について、大学日本語のシャドーイング法導入の効果を分析・評価する。

3 実験について

3.1 受験者について

北京第二外国語大学では、2012年秋学期に、大学日本語の履修を選択する学生は100人以上在籍していた。その学生を三つのクラスに分け、それぞれのクラス人数は35人から50人までとした。その中の一つのクラスは、教育背景を考慮の上、除外した。残された二つのクラスのうち、一つは実験クラス、一つは対照クラスとした。二つのクラスは、全員が大学二年次の学部生で、ほぼ英語学部の学生である。

実験前に、日本語を履修する動機・目的・目標・日本語学習歴などのアンケート調査を行い、最終実験観察対象者を選出した。そのほかに、少数民族・留学生などの要素を考慮した上、最終的に、実験クラスを25人に、対照クラスも25人に絞った。全員日本語学習歴はゼロで、母語は中国語で、第一外国語は英語である。

実験を開始する時期は、授業開始後の2か月半後に行った。当時の日本語力は、日本語の識別と読み上げはほぼ問題ない程度である。

3.2 実験の設計について

実験は、シャドーイング練習法の導入とその効果を観察することが目的のため、学生が使っているテキスト—人民教育出版社出版の『新版中日交流標準日本語初級』—を教材にして、実験クラスはシャドーイング法で練習し、対照クラスは読み上げ法で練習してもらい観察した。教材と方法の詳細は次のとおりである。

(1) 実験教材について

教材の範囲：『新版中日交流標準日本語初級』第4課～第7課、合計4課の本文の音声資料を練習用の教材とした。

教材の長さ：各課の音声資料は、本文と会話文に分けられている。本文の音声の長さは1分未満程度、会話文は1分半程度である。

教材の数量：音声教材の本数は合計8本(本文4本、会話文4本)。

教材の使用：授業のペース(週に2回)に沿って週に1本ずつ、2回練習する。各資料の一回目は、説明・ウォーミングアップ・練習と三つの部分から構成されており、20分から30分程度かかる。二回目は、練習だけで5分から15分程度である。

(2) 実験方法について

実験は、できるだけ自然な授業の流れの中で行うことに努力した。そこで、シャドーイング練習は、普段の授業中、本文と会話文を朗読する部分と取り換え、授業の一環として取り入れた。詳しい設計と流れは次のようになる。

Step1: ウォーミングアップ

普段の授業の流れと同じように、本文と会話文を導入する前に、新出言葉と表現などを説明する。その部分は練習前の準備でもあり、それを通して、本番の練習に入る前に言語知識の障害を取り除く。

Step2: 練習開始

この段階では、実験クラスと対照クラスはそれぞれ各自の方法で練習する。毎回の時間の長さは15分から20分で、ほぼ通常の授業中で行われる本文の朗読用の時間と同様である。会話文の場合、本文より長いので、説明の時間を必要によって延長する。練習の時間も、一般より5分から10分延長する。延長の時間は、対照クラスと実験クラスは同様とする。

(A) 実験クラス

まず、ポーズをいれて本文の音声資料を一回流して、学生たちにテキストを見ないで聞かせる。基本的に内容の理解ができたかどうか確認するが、必要な場合だけ簡単な説明を加える。

つぎに、内容確認後に、シャドーイング法で、本文のメディア教材を聞きながら、声を出して、学生たちにできるだけ同じスピードで繰り返してもらおう。このように、10分から15分続く(会話文は15分から25分)。

シャドーイングの練習を行うとき、初めの5分(本文の繰り返し4回程度)は

テキストを見ながらシャドーイングしてもよい。5分以後は、本文を見ないで音声だけのシャドーイングを続ける。

(B) 対照クラス

まず、確認の朗読は、先生がモデルとなり、文を単位に最初に読み上げ、学生たちがテキストを見ながら、そのあとに声を出して朗読する。内容理解を確認するほか、時に簡単な説明を加える。

つぎに、先生がリードしながら、本文の朗読練習を5分程度続ける。そのあと、学生たちに朗読してもらい、朗読する時間は5分から10分(会話文の場合は5分から10分延長する)とした。このように、練習時間は実験クラスとほぼ同じとする。

Step3: 再度練習

Step1、Step2は1回目の授業で済ませ、その次の回の授業で、同じ教材を本番練習の形で5分から10分続ける。対照クラスでは、状況により、先生がリードして一回読み上げることもある。

Step4: チェック

2回目の練習が終了後、ランダムに学生たちを選び、練習効果をチェックする。実験クラスではシャドーイングの形で、対照クラスでは朗読の形で行う。5分で3-4人チェックする。これは実験の管理のためであり、学生のフィードバックのためでもある。

(3) 最終テスト

8週間の練習が終了後、集中的に聴解テストを行って、実験効果をチェックする。聴解テストは、テキストと関係する内容と無関係の内容と二つに分け、単語の聞き取りをチェックする穴埋め問題を20問(1点)、内容理解の聴解をチェックする選択問題を

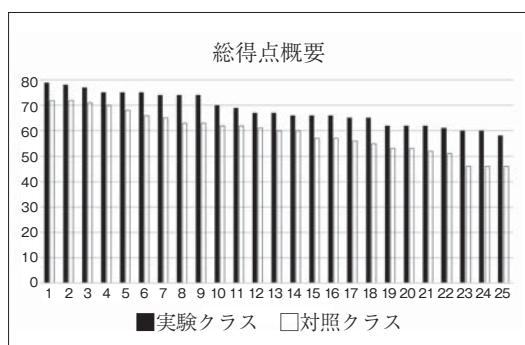
10問(2点)、それぞれの内容に設定し合計60問80点とした。

4 結果報告

ここでテストの報告をする。報告はデータの概観とテキスト関係内容の成績報告とテキスト外の成績報告とに分けられる。

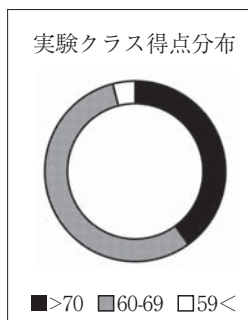
4.1 テストの概要

テストの総得点は80点で、実験クラスは平均得点68.28点、対照クラスは平均得点59.48点で、両者の間に、平均点8.8点の差が出た。

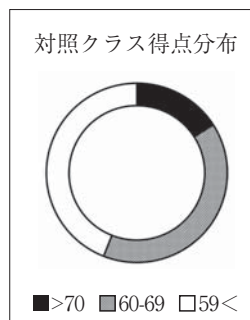


グラフ 1

グラフ 2 と 3 を比較すると、60 点～69 点の得点は両クラスほぼ同じであるが、「> 70 点」の部分と「59 点<」の部分との差が大きい。詳しく点数を比較すると、平均点 70 点以上の学生は、実験クラスの 10 人に対して、対照クラスは 4 人。60 点～69 点の学生は、実験クラスでは 14 人、対照クラスでは 10 人。59 点以下の学生は、実験クラスは 1 人、対照クラスは 11 人という結果だった。また、t 検定を行ったところ、 $p < 0.001$ の水準でも有意な結果の差が出た。



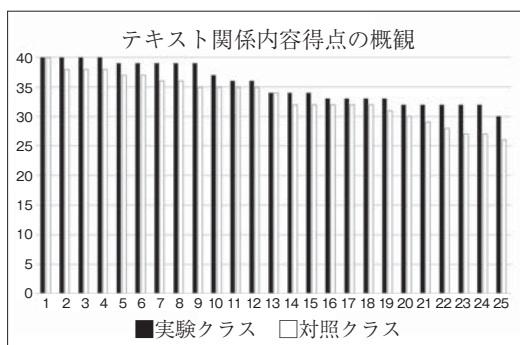
グラフ 2



グラフ 3

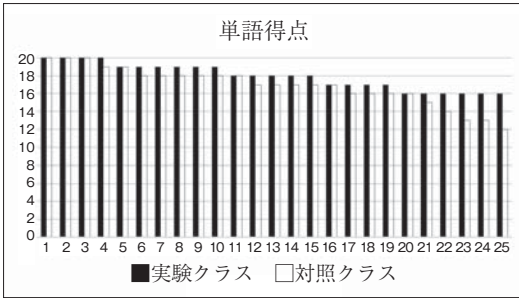
4.2 テキスト関係内容の成績報告

テキスト関係内容の部分 40 点では、実験クラスの平均得点は 35.52 点、対照クラスの平均得点は 33.28 点で、両者の間に、平均点 2.24 点の差があるが、それほど顕著とは言えない。グラフ 4 からわかるように、両者の総合的点数の分布から見れば、対照クラスの方が低い点数の割合がより多いと分かった。それは全体の点数の差に影響したと考えられる。



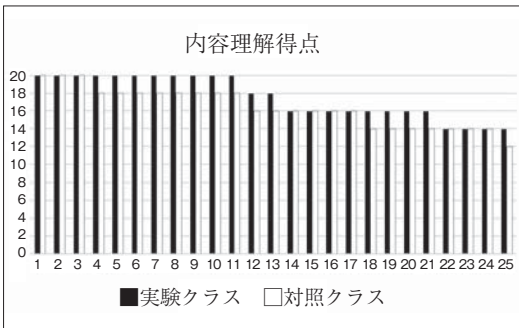
グラフ 4

それを単語と内容理解に分けてみると、単語の部分の 20 点では、実験クラスの平均得点は 17.92 点、対照クラスの平均得点は 16.88 点、両者の差が 1.04 点しかなく、テスト問題を構成した 4 つの部分の中で最も差が少なかった。グラフ 5 は、その具体的分布である。



グラフ 5

内容理解の部分の 20 点では、実験クラスの平均得点は 17.6 点、対照クラスの平均得点は 16.4 点、両者には 1.2 点の差があると分かった。グラフ 6 はその具体的分布である。

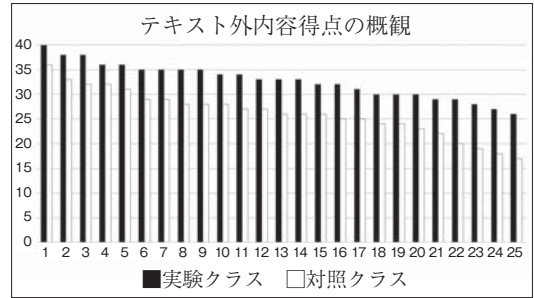


グラフ 6

4.3 テキスト外の成績報告

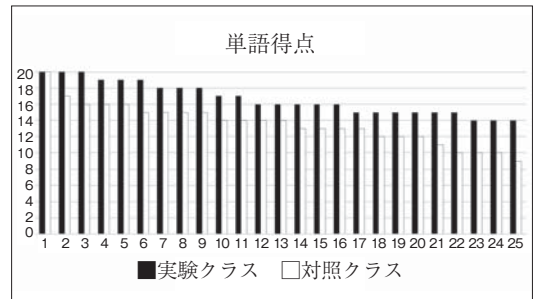
テキスト外の部分 40 点では、実験クラスの平均得点は 32.76 点、対照クラスの平均得点は 26.2 点で、両者の間に平均点 6.56 点の差があり、著しい差が見られたと言えよう。グラフ 7 からわかるように、両者の総合的点数の分布から見れば、対照クラスの方が全体的に、実験クラスと比べて低い水準で分布していることが分かった。

それを単語と内容理解に分けてみると、単語の部分の 20 点では、実験クラスの平均得点は 16.68 点、対照クラスの平均得点は 13.56 点、両者の差が 3.12 点もある。それを、テキスト関係内容の部分と比べてみる



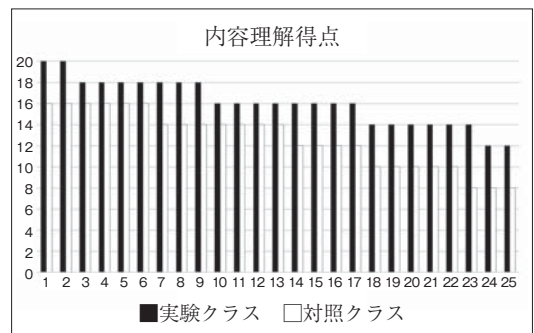
グラフ 7

と、両方とも点数が落ちたが、実験クラスの方はわずか 1 点ぐらいの差しかないのに対して、対照クラスの方は 3 点ぐらい落ちた。グラフ 8 はその具体的分布である。



グラフ 8

内容理解の部分の 20 点では、実験クラスの平均得点は 16.08 点、対照クラスの平均得点は 12.64 点、両者には 3.44 点の差があり、四つの部分の中でも最も差が大きいことが分かった。グラフ 9 はその具体的分布である。



グラフ 9

5 結果分析と反省

以上の実験考察のデータとその後の個人インタビューの内容に基づき、以下のような結論が出せる。

I シャドーイング練習法は、大学日語の学生の聴解力向上に効果があると考えられる。

4の部分のデータからわかるように、大学日語の初級段階でもシャドーイング練習法は伝統的な朗読練習より学生の聴解能力を向上させる効果があると考えられる。この効果はテキスト内の内容だけでなく、より高い言語能力を必要とするテキスト外の内容にも効果がある。

テキスト内の内容においては、実験クラスと対照クラスが共にその内容を勉強したので、テストから見た差がそれほど著しくなく5%程度の差にとどまった。この差から見れば、シャドーイング練習法そのものが原因であると理解することも可能であり、それ以外の理由も考えられる。筆者が実験考察後、一部の学生たちに追加のインタビューをしたところ、多くの学生がシャドーイング練習法に高い評価を与えたことが分かった。その理由の一つは、シャドーイングに慣れると、より専念でき、日本語の勉強も以前より積極的になり、授業への参加などの面でも活発になった。したがって、このようなビリーフの面においての変化も最終のテストの結果に影響を与えた可能性も十分考えられる。その点については、これからの追加観察と調査が必要と思われる。

テキスト外の内容においては、実験クラスは対照クラスと比べると、その得点の差がかなり著しく、およそ15%あった。これは、テキスト内の内容と比較すると、学生のビリーフの面の変化の影響を除いても、シャドーイングの練習で、聴解能力の向上に影

響を与えたと十分に考えられる。それについての追加インタビューでも確認したように、シャドーイング練習法は、伝統的な朗読法より決まった時間内での練習密度が高い。普段2-3回の本文の朗読に必要な時間で、シャドーイングなら3-4回できる。またそのような練習量的な変化だけでなく、練習中、テキストを見てはいけなないので、より集中して耳を使わなければならない。そのため、以前と違って、耳で日本語の情報をキャッチするようになった。

II シャドーイング練習法は大学日語に応用する可能性が十分ある。

今回の実験考察は門田(2007)、迫田(2010)などの研究を踏まえて、シャドーイングは初級の大学でのJFLでも十分効果があると実証した。しかし、先行研究に指摘されたようなよりハードな練習法であるシャドーイングは学生が慣れなくてあきらめる確率が高い。その点においては、今回の実験中の状況観察と追加インタビューの結果から見れば、それほど顕著な問題ではない。その理由は次の三つが挙げられる。

一つ目は教材の選択である。今回の実験に使われた教材は、学生が普段使うテキストそのものであり、学生の語学能力にも合い、抵抗感なく積極的に取り組まれる。

二つ目は練習の強度である。大学日語の学生はそれぞれ自分の専門があって日本語の勉強に使う時間が少ないのが現状である。しかし、今回のシャドーイング練習法は、もともとの授業中の一部を取り換えただけで、学生にそれ以上の負担がない。毎週20分程度の練習2回だけである。

三つ目は実験の参加者たちは自律性がわりと高い。実験の参加者は大学の二年生で、中国の大学入学統一試験の経験からまだ

1年経っていない。そのため、強度の高い練習にはまだそれほど抵抗感がない。加えて、前述したように大学日本語を履修した学生たちは日本に関心があり、それも高い積極性へとつながると思われる。

以上に分析したように、今回の実験考察は、シャドーイング練習法は大学日本語での早期導入が可能であり、聴解能力の向上にも効果があると考えられる。しかし、今回の実験の参加者たちは、比較的勉学意欲が高いグループに属すると考えられる。そのため、結果の効力が一部に限られている傾向があるため、より広い範囲での実験が必要と考えられる。

【参考文献】

- [1] 門田修平 2007 『シャドーイングと音読の科学』 東京：コスモピア株式会社
- [2] 迫田久美子 2010 「日本語学習者に対するシャドーイング実践研究—第二言語習得研究に基づく運用力の養成を目指して」『第二言語としての日本語の習得研究』13号 pp.5-21 第二言語習得研究会
- [3] 戸田貴子（編） 2012 『シャドーイングで日本語発音レッスン』 東京：株式会社スリーエーネットワーク
- [4] 鳥飼玖美子（など）編 2003 『はじめてのシャドーイング』 東京：株式会社学研プラス
- [5] 横山記子 2008 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』 東京：ひつじ書房
- [6] 王婉莹 2005 “大学非专业学生日语学习动机类型与学习强度的定量研究”，日语学习与研究，5 对外经贸大学
- [7] 张威 2002 “对第二外语日语课教学改革的几点建议——关于如何提高学生语言交际能力问题的研究报告” 清华大学教育研究 s1 150-155, 清华大学
- [8] 人民教育出版社 2010 『新版中日交流标准日本语初级上』 人民教育出版社

The empirical study on improving Japanese language skills
by shadowing
-For learners of beginner level in China-

Wang Peng, HU Xiao Chun
Beijing International Studies University,
Dalian University of Foreign Languages

Abstract

Shadowing Training as an Interpretation Training Method has been shown to be effective on improving the language ability of learner.

The purpose of this study is to demonstrate the effectiveness and feasibility of Shadowing Training for college Japanese beginners to improve their Japanese listening skills.

The experimental results prove that shadowing training can improve the hearing ability and feasibility of beginners. From the comparison of the final test scores between the experimental group and the control group, the difference in the scores of the unstudy part is higher than the difference that has been learned. Therefore, it can be considered that Shadowing Training has a significant effect on improving hearing.